

# ESD 佐保川流域プロジェクト（1）

吉村長慶を通して見た現在の佐保川流域における景観構成の試み

竹村景生（奈良教育大学附属中学校）

松川利広（奈良教育大学附属中学校 校長／教職開発講座（教職大学院））

谷口義昭（奈良教育大学 技術教育講座（技術科教育））

小嶋祐伺郎・佐竹 靖・葉山泰三・山本浩大・吉田 寛・今辻美恵子

（奈良教育大学附属中学校）

## ESD Saho-river watershed project

Landscape composition of current Saho-river basin as seen through the Choukei Yoshimura

Kageki TAKEMURA

(Junior High school attached to Nara University of Education)

Toshihiro MATUKAWA

(School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

Yoshiaki TANIGUTI

(Wood Working Laboratory, Development of Technological Education Nara University of Education)

Yuusirou OJIMA・Yasushi SATAKE・Taizo HAYAMA・Koudai YAMAMOTO

Hiroshi YOSHIDA・Mieko IMATUJI (Junior High school attached to Nara University of Education)

**要旨：**ESDが捉える地域と文化そして環境を「流域」概念でつなぎ、流域思考的な学びの総合を、教科ならびに総合的な学習の時間での活用方法についてICT機器、特にタブレット端末を活用することによって生徒たちならびに教育大学生が流域の資料を収集し、検証し、提案していけるよう、学校現場での「ESDの実践力」を育むことを目的としている。本稿は、物語論的に佐保川の景観構成を、江戸・明治・大正・昭和の4つの時代を生きた「独立自尊の一級の知識人」吉村長慶という人物を介して読み取り、持続可能な生活空間とは何かを問いかけ、いかに学校教育実践（特別活動・総合的な学習の時間・部活動等）として取り組むかを提案していく試みである。

**キーワード：**ESD

佐保川 Saho-river

吉村長慶 Choukei Yoshimura

空間の履歴 Space of history

ICT

## 1. はじめに

2014年はESDの10年が一つの区切りを迎えた年であった。そして、そのことはユネスコ・スクールに加盟して、ESDを推進してきた奈良教育大学附属中学校ならびに奈良教育大学にとっても、グローバルな地域の持続発展に具体的にどのように寄与してきたのか、それは将来的な市民意識の形成としての実践力の基盤となる学力を子どもたちに育てることが出来たのか、またそれを支援し教育課程に組み込んでいける教科や総合的な学習の時間の企画力・構想力の涵養として教員養成に寄与できるものであったかの評価が、

私たちのESDの10年の実践に問い返される機会となった。

本プロジェクトは3年計画で進めていく。本報告はその1年次である。1年次は「流域とは何か？」をESDの文脈に位置づけるための方法論の確立を目指すことを目標とした。他方で、本校のICT化（ここではタブレット型コンピュータ；以下「タブレット」と略す）をこの取り組みに活かしながら、着実にメディアリテラシーを育んできている教育大学生との協働の実践の場としても位置づけている。

2年次は、環境調査と住民へのインタビューから、持続可能な地域社会の形成にとって、残すべき佐保川

の景観を浮き彫りにし、川のある暮らしの景観が取り戻されることの価値を学校教育・社会教育の文脈に位置付ける提案を行いたいと考えている。

3年次は、2年次を拡張する形で、佐保川上流域周辺地域へと拡張した、持続可能な景観構成について提言を行うことを目標としている。本プロジェクトの学問的背景としている「流域思考」の具体化を佐保川で実践し、その評価を明らかにした上で、ESDとICT教育を融合した次世代型の地域学習として学校教育に位置付けられるよう提案を行っていききたいと考えている。

## 2. 地域構成の空間学とその方法

### (1) 空間学

本プロジェクトでは空間学を実践の枠組みとし、佐保川の持続可能な景観（『佐保川物語』）を編み出そうと構想している。空間学とは「地球環境の危機の時代に、日本の国土空間に立って問題を捉え、地域の人々と議論し、解決策をさぐっていくための実践的な学問」（桑子・2009）である。そこでは様々な視点と視線から「空間の相貌としての風景の意味」を読み取っていく。特に、「空間を移動する水とそれにかかわる人間の文化や歴史とのかかわり」や「泉や川、海と人々のかかわりを空間的体験の共有により、微地形と言われる空間のわずかな変化をも見逃さない多様な視線の協働により、コンクリート三面張りとなった河川の自然再生や空間の構造を再編する公共事業の意味について新たな方法論の提示を行って」（桑子・同上）いる。

この空間学の方法は、フィールドワークとワークショップが結合した、フィールドワークショップという方法を採用する。それが、空間の履歴の掘り起こしをする。「空間の履歴は、生態系と人びとの生活・活動・文化の歴史的全体像を基礎とし、それが現在の状況にどのようなつながっているかを調べる。また将来どのようなようになってゆくのかという可能性についての考察も含んでいる。」（桑子・同上）

3.11東日本大震災以降、自然災害の回避の知恵や共同体における共助・公助の在り方として、また環境危機の時代の対処法として、この空間の履歴は見直されるようになったのである。それは、単に危機管理上の関心にとどまらず、河川を今日のコンクリート三面張りに代表されるような生活排水路としての機能としたものではなく、親水空間を確保した地域の住空間の中に本来の河川の姿を取り戻す空間構成を住民の意思決定によって実現していこうというQ.O.L.（Quality of Life）を高めていく持続可能な社会の実現を目指したものである。

ここでは、解決されない佐保川支流の吉城川氾濫水対策について、昭和31年の暗渠以降の浸水被害の現状について、ホームページ上でなされる地域の方の提言をテキストにして、流域の空間構成を考えるワーク

ショップを次年度にもつことを目標としたい。佐保川に関する資料がきわめて少ないために、フィールドワークでは河川周辺の写真撮影と聞き取りが中心となり、暗渠以前の写真をタブレットで収集し、それらを手がかりに川とともにある暮らしの風景についてワークショップをもって考えていきたい。

それにしてもこの資料の少なさはなに故なのだろうか。それだけ町の中を流れる小川は、かつては当たり前のように生活とともにあったのであり、河川氾濫も少なかった証拠であろう。生活用水としては、盆地特有の伏流水から井戸水として汲み上げられ、使用され、使用後は川に流される。川に流された水はその生態系の働きによって浄化され、また浄化の過程が川魚を育てていったのであった。そこには、佐保川の景観の中に埋め込まれた地域の方の語りがあり、ウナギ捕りやジャコ捕りの話が地域の古老から聞き取れるのである。それが自然な景観であり、日常であり、人々の原風景をかたどっていたといえる。そして、明治以降の人口増加や戦中・戦後の燃料不足に起因する過剰な薪取りにより、里山は次第に変化し、それは河川にも影響を及ぼしたことだろう。しかし、高度成長以降は町を流れる河川は生活排水の下水路に変貌し、見向きもされなくなってしまった。吉城川は暗渠になって地域住民の目からその姿そのものが消えてしまい、台風や集中豪雨の時にその見えない川の存在に気づかされてきたのである。あるときは生活の風景としてあたり前にあり、あるときからは生活の風景から排除される河川のあり方は、その残される資料の少なさとなって現れるのであった。では、持続可能な社会を考えていく際に、その町の河川と私たちはどのように関係を取り戻していけばよいのだろうか。すなわち、川を語り直す物語が私たちには必要ではないかというのが次の物語論的方法の提案である。

物語論的な景観の編み直し、語り直しについて述べておく。ここでは、奇想天外・大胆不敵ともいえる、ある意味自由人としてその才能と財を縦横無尽に生かし切って、江戸・明治・大正・昭和の4つの時代を生きた吉村長慶（文久3年1863—昭和17年1942）という人物を通じた佐保川の物語を構成していく。日本の近代化の過程をある意味現実的に（質屋・金融業や株の売買・政治家として）、そして超越的に（宗教家、平和論者として）生きたのが吉村長慶である。石材という持続可能な特性の上に、自らの「意志」と、広大無辺な宇宙観ともいえる哲学を披瀝（石工・新谷信正を介してプロデュース）した吉村長慶が見た佐保川を、彼の生き様を織りなす形で景観構成を行い、物語れるものにしていききたいと考える。

それでは、この吉村長慶を通して景観を構成する、その構成原理はどこにあるのだろうか。桑子はそれを、「日本的知的資産」として次のように述べている。「日

本的知的資産の活用とは、さまざまな形で地域社会に伝承されている社会知を掘り起こし、それを地域社会の継承と再生に用いようとする学問的努力である。」ここでは、佐保川の「佐保」という地名や代表する狭岡神社に祀られる神々の名前に埋め込まれた社会知がそれであり、この佐保川の景観に埋め込まれた地霊を体現したといえる吉村長慶その人その行為が社会知そのものであると考えられる。どうして私たちは「日本的資産」に注目するのか。それは、日本の国土・風土には「国土の大部分を占める山稜、狭い土地、急流となる河川、複雑な地形などの条件のもとに、有限な土地と資源の配分とつねに予想を超える災害リスクの配分という社会的制約のもとに国土を管理してきた」（桑子・2008）歴史があり、それらは地名や神々の名に、そして神社などのランドマークに、空間の履歴として刻まれてきたからである。

川とともに生きてきた日本の生活史は、川を中心に村落の景観を構成してきたといえるし、それが流域の風土を育んでいったといえる。かつて吉村長慶が佐保川の景観を捉えた視線をくぐらせて、現在の佐保川の景観を自らの視線で、すなわち子どもたちが現在の長慶になって語り直しをすることによって、既成の河川観を書き直していく自己変容と価値転換を目指すことを物語論に、そのナラティブの評価をどのように社会や暮らしの変革（自治）の力にまで結束させることが、学校教育実践が担うべきかを試みるものである。

## （2）佐保川

ここでは空間の履歴の対象とする佐保川について、概観しておきたい。佐保川は奈良市春日野町・生疏里町（ふるさとちょう）境の花山と芳山の間の谷（一帯は春日原生林）に発し山中を北流、奈良市中ノ川町に至って西に向きをかえ、奈良市川上町の三笠温泉郷を取り巻くように蛇行し、大和盆地に出ると南西方向に流れながら奈良市街の北縁を貫流する。奈良市南法蓮町の奈良女子大学の北側で向きを西に変え平城宮方面へ流れ、奈良市芝辻町で南転し、その後は盆地を貫流し大和郡山市額田部南町で大和川に注いでいる。そして、下流部は天井川となっている。全長15km、流域面積は131平方kmである。最源流部は春日原生林にあり、そこには「鶯の滝」がかかっている。

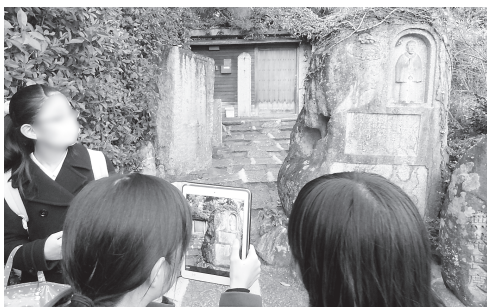


図1 長慶寺前で長慶像をタブレットで写真記録

北奈良町で佐保川は、吉城川と白蛇川と合流している。佐保川は比較的穏やかな川として知られている。洪水被害は上流域よりは、中流域の大和郡山や大和川合流地点が有名である。安達正興『吉村長慶』を読む限りでは佐保川長慶橋付近は大水で木橋が流されることがしばしばあったように書かれているが、市史や奈良県の災害史を紐解く限りにおいては特筆すべき事柄は見つからなかった。ただ、平城京遷都の原因ともなった火力燃料確保のための雑木の伐採は、青垣山からの土砂の流出を引き起こし、盆地部の河川は天井川となり河川氾濫を引き起こしていた歴史がある。明治以降の奈良市域の人口増にとまなう燃料確保は、同様の事態を引き起こした可能性は考えられる。それは、「小さかった頃東大寺横のため池は水深が深かったが、今では土砂の堆積によって池の底が現れてきた」という地域の古老の話からも伺える。だが、佐保の風土は後鳥羽院が「佐保姫の霞の衣ぬきをうすみ花の錦をたちやかさねむ」（後鳥羽院『後鳥羽院御集』）と詠うように、霞み漂う穏やかな土地で、その気候の特性を生かした茶業が平城山では営まれていたのである。この歌に登場する佐保姫（さほひめ）は春の女神である。元は佐保山の神霊であり、948年の『陽成院一宮姫君歌合』では秋の歌に登場している。『記紀』における狭穂姫（沙本毘売）とは同名であることから混同される事があるが無関係とされる。陰陽五行説では春は東の方角にあたるため、平城京の東にある佐保（平城）山に在地の神霊佐保姫を春の女神を祀ったものと考えられている。歌にもあるように白く柔らかな春霞の衣をまとう若々しい女性と考えられる。竜田山の神霊で秋の女神竜田姫と対を成す女神である

## 3. 吉村長慶と出会う下長慶橋

### （1）吉村長慶という怪人

フィールドワークでインタビューを町の人にしたら、「長慶さんのこと調べてんのか？」と、北奈良町の年配者の方は親しみを込めて語られる。それを聞くと、長慶さんは未だこの佐保川の橋を往来されているような感覚に陥ってしまう。だが、吉村長慶とは何者なのか？となると、おそらく地元の住民のほとんどは



図2 旧下長慶橋跡で説明を受けて文章記録をとる

知られていない。しかし佐保川沿いを歩いた人であれば、奈良女子大学横の佐保川と吉城川の合流地点に「長慶橋」という個性的な隷書で刻まれた石碑が建っているのを一度は目にしたことがあるかもしれない。このあたりは今でも吉城川が増水した折は周辺住居に浸水する氾濫原でもある。その氾濫のたびに木橋が流されて来たのを憂えて私財をなげうって洪水でも流されない石橋を造った人物が吉村長慶であり、橋はその名「長慶」から採られている。

#### ●吉村長慶のいろいろな顔

吉村長慶とは何者なのか。安達氏は長慶について次のように述べている。「長慶にはいろいろな顔があることがわかる。相場師、金融業（金貸し）無類の読書家、演説がうまい政治家、宗教家、右寄りの平和論者、石の造形物プロモーター、・・・吉村長慶は身長150cmならずの小柄な体に似合わず、思い通りに豪快な生涯を貫いた畸豪の人、声が大きく大胆不敵、三尺将軍と呼ばれ親しまれていました。」というような人物であったようだ。

資産家でもあったがゆえに、奈良市議員を第1回から長らく務めた政治家長慶は平和主義者でもあった。下長慶橋では護岸に据えられた「三聖人浮き彫り」の説明を行った。（図2）そこには、次のように刻まれている。

嘶軍馬即亡国	軍馬いななき	国ほろぶ
聞弦歌即亡家	弦歌を聞いて	家ほろぶ
箏音鐘響即亡身	箏音鐘響	身イほろぶ

このメッセージは長慶数え75歳の時、第2次大戦はその4年後である。平和であってこそ商いが出来、他国との交易が栄え、国が栄えるという長慶の信念は、シルクロードの終点、天平の都=奈良に生まれ育った商人、政治家の筋金入りの信念である。長慶が人の往来する橋のたもとに、このレリーフを据えた気持ちが痛いほどに私たちの胸に伝わってくる。長慶のESDはまさにグローバルな発想で貫かれている。

#### 4. 活動の概要と評価

この佐保川プロジェクトは3年計画で、本年度は奈良教育大学附属中学校「裏山クラブ」の部活動として取り組まれている。次年度は中学3年生の「卒業研究」において、総合的な学習の時間を活用しての取り組みも視野に入れている。附属中学校のESDの取り組みとして本プロジェクトは位置付けられている。

第1年次の取り組みの経過として、ここでは暫定的な評価を行っておく。まずこのプログラムを空間の構成学で空間の履歴から佐保川流域を考えることを企画したのであるが、古来比較的穏やかであった佐保川ではランドマークとなる神社やその祭神を見出すことが難しかった。それは水害から地域を守る祭神の不在で

あった。しかし、その流域圏の伏流水は井戸水として使用され、北奈良町には1軒に2～3の井戸があるという。調査したデータはないが相当な数の井戸が掘られていたことが伺える。それは、鍋屋町などの地名として鍛冶職人の居住区名として残されている。そこで注目したのは佐保川にかかる2つの長慶と名のつくかつての石橋の存在であった。長慶橋は戦国武将松永氏の居城多聞城を目の前にし、聖武陵もある。そして、吉城川との合流地点でもあった。下長慶橋は奈良近代化の夢、大仏鉄道「大仏駅」の跡地に建つ。この2つの橋が背負う空間の履歴を、長慶さんを手がかりに始めた理由である。

次にタブレット活用によるフィールドワークについて述べておきたい。附属中学校でタブレットが導入されてちょうど1年である。そのため、生徒たちの活用も充分習熟できているとはいえない中でスタートした。タブレットにメモ機能の無料アプリを入れ、簡単な使用説明を行った上で、とにかくフィールドに出て必要な機能に出会いながら使い方に習熟していこうという方法をとった。タブレットを校外で使用することは今回が初めてである。それだけに、慎重を期したが、この取り組みの評価は次年度からの沖縄修学旅行や臨海実習でのフィールドワークでも活用される経験知として蓄積されたといえる。デジタルカメラとの違いは、写真を撮ってそこにメモを書き込めることが大きい。また、撮った写真資料の確認も画面が大きくて複数でその場で出来てしまうことは、よき資料の蓄積として次の話し合いのステージでの準備として役立っている。



図3 学生よりタブレット記入の説明を受ける

支援に入ってくれた教育大学生は、生徒たちのタブレット活用の困難点にたいして、その質問も含め適切なアドバイスを与えてくれていた。図3は、撮影した資料へのコメント記入の方法をアドバイスしているところである。従来であればデジタルカメラとメモ帳が分離していたものが、タブレットそのものが野帳としての機能を果たしていて、その有用性と学びの広がりを生徒たちは実感できたと考える。図4は、支援学生がフィールドワークしたメモと、生徒たちのメモを比較しながら、現地での本日のフィールドワークの合評

会の風景である。経験知をもっている学生は、生徒たちにルートマップ形式に写真とメモを埋め込んだ画像を提案していた。ここでの話し合いの中で、周辺地域の地図を取り込んで次回はそこに記録を残していきたいという声が子どもたちからおこり、学生がその要求の実現の方策を次回までに約束する形でフィールドワークは締めくくられたのであった。



図4 記録の合評会とルートマップの解説を受ける

次世代を担う教員養成にとってICT活用は欠かせない。しかし、その経験知はどのように活用すればいいのか。学校現場ではどうしても「教える人—教わる人」の関係性が固定されてしまいがちで、「こうするためにはこうさせる」という、合理性が優先されて、子どもたちのニーズに気づけていなかったりする。しかし、ここでは場面を介して共に経験知を深めていく協働性がある。

以下は、佐保川フィールドワークに支援で参加した学生の感想である

今回、『裏山クラブ』の佐保川フィールドワークに同行、並びに補助を行った。ここでは活動を通して感じ取ったことを述べることにする。

1回目のフィールドワークでは、附属中学校から長慶寺、そして下長慶橋へ向かい、長慶と佐保川の関係について実際に写真等の記録を、タブレットを用いて行った。タブレットを用いることは、気付きを動画や写真と共にリアルタイムに記録していく利点があるが、実際に導入してみて気づいた事を2つ述べる。まず、タブレットの数が人数に対して大変少なく、フィールドワークの記録に参加できない生徒が幾らか見られたことだ。もう一つは、タブレット活用以前に、生徒の大半が、フィールドワークでの記録の取り方を知らない状態であり、記録方法の素地ができていなかったことだ。タブレットを活用する前にまず生徒に記録させる上での注意点について指導する必要があると感じた。

2回目は、附属中学校内の探検を行い、タブレットを用いたデータのまとめ方を生徒に考えさせ

た。結果としては、地図の活用や、データをまとめる際に気を付ける点に自ら気づき、即座に改善していこうとする姿勢が見られたこと、またタブレットの活用技術についても柔軟に対応していく姿勢がおおむね感じられたことは、今後のフィールドワークにも期待できる点である。又、現状タブレットの数が少ないので、当分はワークシートも配布し、全員が各自気づきを記録できるようにすることも必要かもしれない。

#### 《バーチャル佐保川について》

佐保川フィールドワークを通して将来的に持続可能な佐保川の景観をバーチャル空間に作成するという試みであるが、CG作成ソフトや既存のインターネットサービス（Google Earth等）を活用すれば可能である。その際には、事前の使用の確認や練習など、準備を入念にすることが必要だと感じた。

次に、生徒の感想を紹介しておく。

T先生からは、主にipadの上手な利用の仕方を学びました。前々回は佐保川でフィールドワークをしましたが、私たちは写真を載せ、感想をちょこっと書いただけなのに比べて、先生のはルートや行った順などが詳しく書かれていてとても分かりやすかったです。日時を書いておくとよいということも知りました。外へ出ることの面白さは、学校内では体験できない町の人との関わりや、少し迷子になってみて意外なところに出て発見があったことです。さまざまなドキドキやワクワクがあって楽しかったです。（Iさん）

タブレットでのフィールドワークは難しいという先入観があったけど、使ってみるとデジカメの機能やメモの機能があってとても便利だとわかりました。これなら、自分もっと使いこなしたいという気持ちになりました。佐保川は奈良に住む人にとって身近な川だけど、実際のところは佐保川の歴史については何も知りません。長慶さんについても、橋の名前くらいしか知らなかったし、でもお寺の名前にもなってるんだからすごい人なんだと思うから長慶さんのことを深く知って、タブレットを活用したりして、みんなにもっと知ってもらおうと思います。（Nさん）

## 5. おわりに

川を主題にするのは環境教育というイメージが強いが、佐保川プロジェクトは「空間の構成学」というコ

ンセプトでスタートをしたばかりである。それが、中学校の現場で、またはESDでどのような教育的意味を見いだせるのかは次年度以降の課題として残された。

#### 引用参考文献

1. 桑子敏夫「空間の履歴」東信堂 2009
2. 安達正興「宇宙菴 吉村長慶」奈良新聞社 2011